

所属学部/研究科・学年(留学時): 工学部4年

留学先大学・参加コース: University of California, Berkeley “Islam 2.0: Media & the Shaping of Muslim Identity in the 21st Century”

コース期間: 2012年 7月 2日 ~ 2012年 8月 10日

卒業・修了後の就職希望先: 1.研究職 2.専門職(医師・法曹・会計士等) 3.公務員 4.非営利団体 5.民間企業
6.起業 7.その他()

1. 留学先大学の概要

University of California, Berkeley はカリフォルニア大学の中で最も古く、世界トップの研究とリベラルな雰囲気知られている。移民の多いカリフォルニア州のためか、住んでいる人々は多種多様ながら、大学の位置している都市 Berkeley は大学都市であり、San Francisco に近いものの、穏やかな街である。

2. 留学の動機

私はかねてより、日本国外の高等教育機関で学ぶことを渴望していた。最大の理由としては、現在日本の大学で多くみられる講義中心のカリキュラムでは刺激が足りないと感じていたからである。真面目に勉強をすれば成績が取れてしまうだけの授業は、高校までと変わりなく、自分の成長のためにはもっと挑戦的なことをしたいと思っていた。特にアメリカでは、教員対学生、学生対学生が率直な意見を交わし合い、切磋琢磨しあうとのことで、これまで温室のような環境で育ってきた自分を触発し、可能性を試してみたいので、大学院進学後に留学することを検討している。今回 IARU GSP に応募したのは、その前段階として、英語で学習することおよび海外で生活することについて、何が必要か・不足しているかを実際に体験する非常に良い機会だと思ったからだ。

もちろんそれだけではなく、加盟大学の提供するプログラムがどれも大変魅力的なことも志望の大きな動機になっている。これまで日本の教育機関ではほとんど行っただけでなかった実践的な内容のものが多く、また、自分の知識の範囲にとどまらないことを学ぶことができそうなものばかりだからだ。

また、世界の 10 大学から集まる学生たちとの交流も、非常に楽しみなことであった。現在所属する東京大学にも海外からの留学生はおり、キャンパス内でちらほらと見かけるものの、実際に彼らと会話することは、自分から交流会などに参加しない限りほとんどない。日本に住んでいると良くも悪くも枠にはまりがちに感じられるので、違った環境で育った学生たちと議論することは、自分の持っていない考え方をたくさん吸収する良い機会になるはずだ。そして、バックグラウンドと思考の関係を知ることで、アイデンティティの問題を考えたいと思い、応募した次第である。

3. 留学の準備

①プログラムへの参加手続き(申請にあたってのアドバイスなど)

バークレーへの直接の手続きは全てオンラインで行うのだが、ビザ申請・履修登録・寮への申し込みなどが5つほどのサイトに分かれていてややこしかった。また、どれが必至でどれは任意なのかがはっきりしていなかったのも、いくつか問い合わせた(現地での学生証にデビットカード機能を加える手続きは任意)。また、バークレーに直接支払われる奨学金(Friends of Today)の処置のされ方がわかりにくかった。3000ドル支給されて、うち授業料を引いた残りを一度返還してくるのだが(サイトが分かれているのでそのまま他の経費には回せない)、現地のオフィスで受け取れるというメールが来ていたにもかかわらず、渡米した翌日になって日本の住所へ小切手として郵送されてきて驚いた。

②ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど)

F-1 ビザ (留学ビザ) を取得した。申請には I-20 という書類を留学先大学から受け取る必要があるが、これには必要書類提出後から 2 週間ほど要した。ここでの必要書類は銀行の預金残高証明とパスポートのコピーであった。預金残高証明は金融機関の窓口で発行してもらう必要がある。口座を開設した支店で手続きしたため 3 日で手に入ったが、異なる支店で申し込むと 5 日以上かかると言われたと記憶している。I-20 には SEVIS Number という番号が記されていて、この番号がないと、アメリカ大使館でのビザ申請手続きを進められない。この手続きは DS-160 というもので、オンラインで必要情報を記入していくのだが、かなり煩雑で 1 時間以上は要したと思う。その後の大使館での面接予約は、偶然かもしれないがそれほど埋まっておらず、また当日も待ち時間 1 時間ほどで済んだ。面接自体は 3 分ほどで終了し、どこに何を勉強しに行くかと日本への帰国の意志をはっきり示すだけで良かった。ビザが郵送されてきたのは書類に記載されているよりも早く、面接の 5 日ほど後だったと思う。しかし、I-20 を受け取った時点でプログラム開始まで 1 ヶ月を切っていたので、その後の手続きが全てスムーズに進んで運が良かった。ややこしかったのは、I-20 を受け取った後にオンラインで I-901 という手続きをし、発行料 (200 ドル) を払わなければならないということが明記されていなかったことと、大使館への持参書類は頻繁に変更されているらしく、信用できる情報を手に入れるのが面倒だったということだ。大使館のウェブサイトにははっきり書かれていないが、私は念のため成績証明書と預金残高証明およびパークレーからの履修登録証明を加えて持って行った (ビザと一緒に郵送で返還される)。

③保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等)

大学生協でもらったパンフレットを比較し、AIU の長期留学用 (46 日以下) の IS7 というものに申し込んだ。選んだ基準はカバーしている範囲がもっとも大きかったため。

④留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど(履修・単位・試験・論文提出等に関して)

7 月中にある必修科目の成果発表会に出席できないことになってしまうため、指導教授とコース長の先生と、派遣が決まってすぐに面談をしていただいた。結局、6 月中にすべてを終わらせ、プレゼンテーションは事前に録画したものを当日流し、質疑応答はスカイプで行うということで渋々ながら配慮してもらった。その際、単位認定はできればしてあげたいということを言われたので、事務室に「留学届」を出すこととなった (単位認定が不要な場合は非公式の「海外派遣届」のみで良いそう)。その他の講義についても、各教授に個別にうかがい、代替課題を出していただけるか、メール提出でも良いか、といった相談をして、ほとんどの先生が対応くださった (成績はまだ発表されていないが)。試験で評価する講義を今学期に履修していなかったのは良かったと思う。

⑤語学関係の準備(出発前の英語レベル・語学学習等)

プログラムに応募するために初めて受験した TOEFL iBT が 90 点で、そのスコアで応募した。出国直前にも再受験して 94 点だった。夏学期の課題を前倒しで行っていたので、特別な勉強はできなかったが、時間のあるときには TED を見るようにしていた。

⑥日本から持参した方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど

留学先大学の IARU GSP 担当者は非常に丁寧に対応してくれるので (各書類担当部署は返信をなかなかくれず、また他のサマープログラムも多数開講されているため、奨学金についてなどは通じていない点もあるため)、質問や書類の催促はどんどん行って良いと思う。

また、クレジットカードは持っている非常に便利だと思う。学生カードは申請から 2 週間ほどで作れ、費用はかからなかったもので、留学時だけのためでも持って行く価値はあるだろう。

4. 留学生活について

①住居(住居の種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など)

International House というキャンパスのすぐそばの寮に住んでいた。これは、パークレーから案内された手続きに沿ったのみで特別検索したわけではない。ダブルルームで、ルームメイトは同じプログラムに参加するデンマーク人だった。他の同プログラム参加者も皆、ほとんど隣同士の一続きの廊下沿いの部屋に住んでおり、非常に交流しやすかった。家賃はオンラインで支払ったのが6週間分で計3000ドル以上(食事込み)、現地到着後、リネン代39ドルを現金で支払った。部屋の設備は二段ベッド、五段のクローゼット、書棚つきの机二つ、書棚一つ、サイドテーブル一つ、ハンガーなどをかけるスペースがあり、コンセントは4つだったが、ルームシェアするどちらか一方は不便を強いられる位置にある。建物共々新しいわけではないが、さっぱりとしていて特に悪い点は感じなかった。部屋の椅子がやや堅いのでクッションを持って行けば良かった。入浴については、各階にあるシャワールームを用いた。カーテンとドアのみなのでやや寒く、洗面器があれば良かったと思う。また、靴を脱ぐ習慣がないので、ビーチサンダルやスリッパが必要だ。洗濯は、コインランドリーと乾燥機が設置されている。他には、24時間の図書室、Game Roomという卓球台やビリヤード台のある部屋、ソファとテレビのある大広間、各階にはソファとDVDプレイヤーのある談話室があった。食事に関しては、Dining Hallとカフェテリアが設置されている。不便だったのは自由に使える調理設備が電子レンジしかなく、お湯をいつでも自由に沸かせるわけではなかった点か。建物内は全て無線LANが通っている。他のプログラムに参加している学生は、もっと安い住居を見つけていたが、International Houseは、いるだけで自然と人々が集まって友人が増えていく環境だったため、大変良かったと思う。

②生活環境(気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など)

現地での夏は9、10月らしく、7月は朝晩10℃くらいにまでかなり冷え込んだ。夏のカリフォルニアのイメージとは全く違う気候だが、日差しはかなり強いのでサングラスが必要。だが、からっとしているので、過ごしやすい。大学周辺は各国料理屋と洋服屋が多い。コンビニはないが、Walgreensというファーマシーでたいていものはそろそろ。交通機関は、学生証を見せると無料で乗れるので、ダウンタウンやサンフランシスコまで行くときはバスを利用していた。食事はInternational House内のDining HallかCaféを毎日一回は利用し、その他は屋台で買ったり、外に食べに行ったりしていた。コーヒーが日本より安く、一杯2ドル前後で、また、美味しいカフェもたくさんあったので、かなり利用した。

キャッシュは、現金でしか受け付けない飲食店や、友人らとまとめて精算するとき、コインランドリーなどで意外とすぐに減ってしまった。細かい買い物もカードでできるため、その後は主にクレジットカードを使っていた。また、奨学金の剰余分がチェックで送られてきたため、現金化するために現地で銀行口座を開いた。開設は難しくなく、また、帰国する際に全額引き出して口座を閉鎖したため、費用もかからなかった。

③危機管理関係(留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気がつけた点など)

日の入りが遅く、外が完全に暗くなるのが9時くらいなのだが、飲食店以外の店舗が閉まるのが非常に早い(5時くらい)ので、夜間はやはり複数人で行動すべきだと思う。ヒッピーや浮浪者が声をかけてくるが、治安はアメリカにしてはかなり良い方ではないか。学校の保健センターがあり、病期は一旦全てそこで診てもらえるようである。一度ルームメイトがインフルエンザとアレルギーを併発し、そのアレルギーは環境の変化によるものだったらしいので、人によっては注意が必要かもしれない。

④留学に要した費用とその内訳(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算)

航空券はANAで乗り継ぎなし、往復およそ16万円。授業料は2760ドル。教科書代60ドル。家賃3000ドル超。食費は一食およそ7~8ドル、ただし家賃には、60食分をDining Hallで食べられるカード代が含まれている。交通費はAC Transitバスは無料、BART(電車)はサンフランシスコまで片道4ドル弱だったと記憶している。

⑤奨学金(受給していた場合は、支給機関・支給額など)

Friends of Today: 3000 ドル

JASSO: 16 万円

⑥学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末や長期休暇の過ごし方など)

プログラムの方でこのクラスの参加者向けだけに、いくつか短いツアーを用意してくれていたのので、積極的に参加した。キャンパスツアー、サンフランシスコツアー(数回に分かれており、ケーブルカーに乗ったり、オークランドからフェリーで向かったり、ゴールデンゲートブリッジを歩いて渡ったりした)、いくつかの美術館にも訪れて非常に充実していた。他には、独立記念日に港まで花火を見に行ったり、電車とバスを乗り継いでアウトレットに行ったり、ヨセミテ国立公園に行ったりした。

5. 学習・研究について

①履修した授業科目のリスト(そのうち、帰国後東京大学で単位認定の申請を行ったものに●をつけてください。)

- ・ Media, Culture, and Society: The Middle East in the Global Context
- ・ Directed Group Study

***単位認定の是非についてはまだ不明

②留学中の学習・研究の概要(授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている授業等)

毎回各パートの担当教員が一人ずつで、授業の前半 90 分はイスラムについての講義、後半 90 分はウェブサイト作りのためのワークショップやインターネットに関する討論という構成だった。いずれも毎回読み物の課題が非常に多く課され、また、各自のウェブサイトを作り、週に 2 回ほどはブログ記事を執筆するのも課題であった。授業中は本筋とは直接無関係なことでも発言が自由に許されており、そこから議論がはじまることもしばしばだった。文献検索の仕方を図書館で学んだり、ゲストスピーカーを呼んだ講義が実施されたりしたこともあった。中間課題と最終課題はウェブサイト上に発表し、学術論文や記事、ソーシャルメディアから情報を集めて、講義で学んだ理論を用いて論じた文章を書き、また、ウェブツールを使用して何らかのビジュアライゼーション(プレゼンテーションスライドやタイムラインなど)を伴わなければならない。最終課題は 2 人一組のグループワークで、そのほかの教授らをゲストとして呼んで 15 分間のプレゼンテーションも行った。中間課題については、発表したもの全てについて、詳細な評価が各人に配られ、良い点、足りない点、どうすべきかまでアドバイスが与えられるので非常に参考になった。

③学習・研究面でのアドバイス

英語で論理的な文章を書く訓練をしておいた方が良いと思われる。はっきり主張し、要点をしぼることが重視されている。また、全員の課題はウェブ上で自由に見られるので、英語を日常的に使っている国からきた学生の文章は、どのような言葉遣いや構成にしたら学術的になるのかを示唆してくれてためになった。また、小規模なクラスなので(学生 10 人で、教員 2 人)、教員には授業後やメールでも要望を伝えたり、相談したりすると、かなり親身に答えてくれた。

④語学面での苦労・アドバイス等

当初は莫大な量の読み物の課題に非常に苦労し、読むだけでも慣れない人文科学系の概念を理解するのに時間もかかっていたが、読むスピードは着実に向上することが自分で感じられた。しかし、書くことと話すことについては、6 週間ではあまりに短く、自分のいたらなさを実感した。書くことについては、現地でできた友人が文法のチェックを申し出てくれたので、いくつか直してもらうことが出来てラッキーだった。話すことについては、教授陣の話すことは明瞭で理解できるのだが、友人らの会話(特にアメリカ英語以外のネイティブスピーカーの英語)は聞き取るのが難しく、そして早口で話すため、完全にわかっている訳ではないので突

っ込むのもためらわれて、聞いてばかりになってしまうこともしばしばだった。中国・韓国・台湾人と話すときの方がリラックスして話せていることにも気づかされた。グループワークのパートナーだったシンガポール人の友人は、その中間的な立場で、わからない表現を言い換えてくれるといった配慮をしてくれたので、かなり助けとなった。

6. 留学先大学の環境について

①留学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)

公式には、文章を校正するチューター制度が用意されている。私が住んでいたところはほとんど全員が留学生だったので、特別何か違ったことをしてもらえているという意識はなかったが、留学生だからということではなく、誰に対してもあらゆることがオープンな雰囲気ではある。パークレーは大学都市のため、夏休みの期間は留学生しかいないので、街の人々は非常にフレンドリーで話しかけてくれることも多かった。

②大学の設備(図書館・スポーツ施設・食堂・PC 環境等)

大学内には図書館が 23 もあるのだが、うち利用したのは 2 つだった。綺麗で学習しやすい環境であり、また、有料だがコピーやスキャンも利用できるので、不便はなかった。蔵書もかなり多く、英語以外の言語の本も相当数そろっている。

友人らが利用していたものとしては、学校のスポーツ施設が 10 ドルで期間中使い放題と、校内の屋外プールが一回 5 ドルというのがあったと思う。

校内に食堂はないが、2 つのカフェと、東大でいう生協のような Student Store というお店がある。

大学内はどこでも無線 LAN に接続することができる。

校内は緑が多く、また、東大よりもいくらか大きいくらいの歩いて回れる面積なので、非常に心地よい空間であった。

8. その他

①準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物

- ・ イスラムの基礎を知るために

『日本人イスラム教徒が語る イスラムのことがマンガで 3 時間でマスターできる本』

他には、一通り歴史を復習し、地図を持って行くと理解しやすいと思われる。

- ・ イスラムの現在の状況を知るために

(雑誌)『pen+』「いまこそ知りたい、イスラム」

- ・ 事前知識としては、オリエンタリズム (orientalism)、世俗主義 (secularism) といった用語の意味を把握しておく、理解がスムーズだろう。宗教だけでなく、政治制度や民主主義についても何かしらの関心があるとよいだろう。

②今後留学を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

日本から留学する場合、時期の問題は大きなネックになると思います。私は大学院入試直前ということもあり、非常に迷いましたが、チャレンジして本当に良かったと自信を持って言えます。他に誰も日本人学生がおらず、辛く寂しい時間ももちろんありましたし、パークレーで出会った人々は現地の学生も留学生も非常にオープンで、親切で、そしてタフな課題を一緒に協力して乗り切ったことで本当に信頼と絆を築くことが出来たと思っています。日本にいるだけでは絶対にできないことを、ぜひ体験してほしいと思います。

④その他東京大学のホームページ等に掲載可能な留学中の写真があれば添付してください。



全クラスが終了した翌日、先生を含めてクラス全員で学校の裏にある丘に登り、ピクニックをした際。後ろに見えるのはバークレーの街と海。

2012 IARU Global Summer Program 学習成果に関するレポート

私が今回 IARU GSP に参加したのは、今後の進路として海外の大学院に進学して勉強を続けることを検討しているため、前段階に短期間でも留学経験を積んでおこうと思ったことが第一の目的です。また、日本ではなじみの薄い宗教という問題、特にイスラム教という、実態を知らない割に与えられるイメージばかりが先行する宗教を取り上げ、現代を象徴するメディアという枠組みとの関係性を検証するというこのクラスで、国際社会で生きる者として必要な知識を身につけることができるのではないかと期待もありました。

プログラムの中で最も驚いたことは、授業中の発言が本当に自由であるということです。講義内容と直接関係のないようなことでも、平気で手を挙げて発言し、長くなっても気にする素振りは見せず、挙げ句の果てにはその新しいテーマで他の学生と議論が始まることもあります。しかし、教授は話の本筋に戻そうとはせず、議論が終了するまで身守っています。日本でなら授業妨害とみなされそうなこの行為が当たり前とされていることが第一の驚きでしたが、同時にこれは更なるショックを受ける機会でもありました。リスニング問題でよく聞くようなアメリカン・アクセントの英語ではなく、また、スピードも早く、しばしば自分の知らない単語を使って話が展開していくので、聞くだけで精一杯で、何も声を出せない自分にもどかしさを強く感じました。単語は拾えても発言者の立場はどちら寄りなのかわからないこともあり、普段英語を聞く際に、いかに文脈から推測して補っていたかを思い知らされました。また、他者の話す英語を聞きながら、全く同時に自分の意見を英語で組み立てるということは非常に難しく、言いたいことはあるのに言い出せないという悔しさも味わいました。これらを完全に克服するには 6 週間という期間はあまりに短く、これまでに経験したことのない劣等感を感じたことは、再度異国の環境でチャレンジしてみたいと思わせてくれた一つの動機となっています。

一方、学習環境の違いに良い意味で驚いた点もあります。それは、詳細な評価レポートが与えられるということです。中間課題を提出してからおよそ一週間後、それまでに提出・発表したもの全てについて、点数と良い点、悪い点や至らない点が記された評価レポートが学生一人一人に配られました。今後はどのように行うべきかやどう修正したら良いかまでを指摘してくれており、日本ではこれほど丁寧なフィードバックが戻ってくることは非常に稀なので、苦勞して作り上げたものに対して時間をかけて見てくれたという純粋な嬉しさを感じました。また、自分の英語力に対してまだ不安でいっぱいだった時期なので、客観的な評価がなされたことは非常にためになりました。書き方や論理展開のくせを指摘されたことは、また、英語を使って思考する際と、日本語を使って思考する際に違う頭の使い方をしている自分がいるということにも気づかせてくれました。この点は大変重大な問題だと感じており、というのは、短い文章を書く際には直接英語のまま考え、英語でまとめることができるのに対し、学術論文を引用し自らの意見を論じるような、もっとアカデミックな叙述が必要な際には、初めから英語で考え始めると考えがまとまらず、結局は日本語で論理を組み立ててから英訳する、という二度手間のプロセスを経ないと書くことができなかった、という自分の姿を直接反映しているからです。ここでも自分に憤りを感じるものがしばしばあったことを覚えています。

とはいえ、友人たちの協力に数多くの点で助けられ、クラスを楽しみながらも修了できたと感じています。まず、私の住居であった **International House** は、学校にほとんど併設されている、留学生向けの寮なのですが、そこには多くの学生と一度に出会うことのできる環境があります。ただ単にただで話に参加してきて、そして友人となり、その後も交流を続けられている関係になれたということは、アメリカという地が本当にグローバルで、オープンであることの証左であるような気がします。様々な国の文化や考え方の違いを話し合い、相違点について論じ合うことは本当に興味深く、そして思いがけない相似点を発見することがまた楽しい時間となりました。そうして知り合った友人のうちの一人は、東海岸出身で、大学院からバークレーに入学するため **International House** にやって来ており、学部生時代には英語のチューターをし、また日本に友人がいる、とのことで、こちらが頼む前から私の文章の文法チェックを申し出てくれ、親切にあずかることができました。また、クラスメイトとは、最終課題であるグループワークを通じて、本当の意味での絆を深めることができたと感じています。与えられた時間的にも、量的にも、質的にも、要求の高い課題であったと思うのですが、夜中まで話し合い、構成を練り、共に作業したことは、時にストレスでピリピリしそうになりながらも、互いの協力で回避して、なんとか形として仕上げられたことで達成感を共有できました。短期間で濃密な時間を過ごしたことで、自分の苦手なものだけでなく、相手が何が得意かを知ることができ、どの点をサポートしたら良いかに気づけ、カバーし合えたのだと思っています。

アメリカで勉強する上で最も大切なことは、受け身にならない、ということに尽きると思います。とにかく自分から言えることは全て言うことが、自分のためにも相手のためにも、コミュニケーションのためにも英語力向上のためにも、とにかく重要です。お店で買い物をしているだけで、店員さんは愛想よく、その日の予定を尋ねてきますし、定型文でない答えを返してくれるので、話はずんで少し幸せな気持ちになって店を後にします。当初はこの習慣に戸惑い、うまく返答できなかったのですが、よし、今日こそは、と意気込んでからは楽しいものとなりました。行けば知らないうちに英語がうまくなるというのは完全に迷信であり、自ら書いたり話したり、発信し、使っていかないと、せっかくの現地で勉強する機会を活用しきれないと思います。今回は、クラス内に日本から来た学生が自分一人だったということがラッキーでした。嫌が応でも英語を使わざるを得ない状況で、寂しい思いをしたくなければ積極的になるしかないため、変な意味での遠慮は捨てることができました。とはいえ、思慮深さは忘れて

はいけないと思いきらされる出来事もありました。今クラスのテーマであった宗教の問題は大変デリケートであり、授業中、ムスリムの学生の気分を害するような発言がなされ、一度教授が対応したことがあります。また、英語には日本語ほどの敬語がないからといって無礼講が許されるわけではなく、何気なく使ってしまった **Can you ~?** はぶしつけな響きを伴うことを指摘されました。こうしたことも、多文化の入り交じる環境ならではの一側面である気がします。

今夏の IARU GSP の経験を得る前は、大学院から日本を出ようと考えていました。しかしその理由には漠然と海外で勉強することへの憧れが大きく、こうして一度アメリカで短期間ながら勉強してみたことで、もう少し自分の中身を伴わなければもったいなくなりそうな気がしているのが現在のところ。前述した英語と日本語での思考の違いというのは、ある程度不可避ながらも、学問をする上では、この現状は不十分と言わざるを得ません。一定の強固な土台を築いた上でないと、もっと積極的な周囲に流されて終わってしまいそうなのは恐ろしいことです。今回感じた悔しさをリベンジするためにも、再度挑戦しようと思っていることは間違いありませんが、まずは、日本の温室の中で育って来た自分の不足な点を思い知らされたことが最大の収穫であり、もっと力をつけて臨んでやる、という原動力を与えてくれた機会でありました。